

ドナドナが異世界にドナドナされる話

ルテチウム

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

リゼロの強欲の魔女エキドナが、『転生』ときで逃げられるとでも、兄さん?』の世界に単身転移したら、と言う妄想です。

遭遇

目

次

1

## 遭遇

「——ふむ」

首を傾げる一人の女がいた。

澄んだ白髪に白い肌。それに反し、着こなすのは目が覚める様な黒い服。

一見すると葬式に向かう淑女かと見間違えるその姿は、だが彼女の本質を現しているとは言い難いだろう。

女は微笑む。それは異様な事である。女性一人がこの暗い森に立ち尽くすのは、余りにも心許ない。だが、そのような心配や警戒など欠片も見て取れなかつた。しかし、それも当然であろう。

なぜなら彼女は、『魔女』なのだから。

「ああ……やはり世界は未知で満ちている」

そして彼女は、恍惚した表情でポツリと呟き、そして——、

「アンタは……誰だ？」

いつからいたのか。後ろで声を響かせた銀髪の少女に。魔女は、強欲の魔女は——エキドナは。ゆっくりと視線を向けた。

「ボクはエキドナと言う者さ——だけどキミが求めている答えはこれじやないだろう？

しかし……すまないね。今のボクは、ボクを『ボク』であると定義する物を持っていないんだ。それでも敢えてボクを示すなら……そうだね。

——世界ドロツプアウトから弾かれたした、哀れな女さ」

爛々と煌めく好奇の眼光が、少女を貫いた。



「ほーん、つまりアンタは異世界からの『旅人』ってことか？」

「その認識で間違いないよ。自慢じゃないが、ボクはキミの想像もつかない様々な物を見てきたんだよ？」

——楽しげに話し合うのは二人の女性。自慢げに語る女に、少女は興味深そうな瞳を向ける。

いや、と言うかこれはむしろ打ち解け合っていると言つても良いだろう。

エキドナの少々興の入った語りに、少女——ティーナ・クリーズは更なる興味を見せる。

「つまりはアンタは『四種の神器』と同じ出自だつて言いたい訳だ。なるほどなあ……」

「四種の神器……興味深い言葉だね。おんな是非ともご教授いただきたい」

「……つくづく変な奴だな、アンタ」

騙そうと言うなら分かるのだ。そもそも、『四種の神器』と同じような出身など、本来なら誰が信じる物か。

そう、本来なら。

ティーナ・クリーズは違う。ただ、一つの確信を持つて彼女はここまで至っているのだから。

だから、彼女は目の前の女の素性も目的も聞くことはしない。だから、必要な事だけを口にする。

「んー……そうだな、『四種の神器』つーのは、まあ……すっげえ強い武器さ。アタシ達が使う『精霊』の力じやなくて、異世界の力を有してから規模も発揮する威力も埒外だ。昔々の4人の勇者サマ達が一個ずつ持つてたから、数は4個。今はそれぞれ4つの大国が一つずつ持つてるな」

「なるほど、『精霊』か……参考になるよ。ありがとう。それにしても、随分と丁寧に教えてくれるんだね」

優雅に微笑む目の前の女。

この女との交渉に必要なのは、ありとあらゆる情報だ。この女は、紛うことなく、この世界から外れた力を有している。野放しにするに

は、余りにも危険過ぎる。

故に、ティーナ・クリーズはここに居るのだ。

「アタシは路頭に迷った美人を見捨てる程薄情じゃなくてな。さて……んで、次にアンタが聞きたいことはなんだ？大抵の事なら答えてやるぜ？」

そして、彼女はニヤリと口元を歪めると、思慮深げに顎に手を当てるエキドナを真っ正面から見詰める。そして、ティーナはゆっくりと言葉を紡いだ。

「さあ、なんでもアタシに問うといいさ。強欲にもこの世界の全てを知らんとする『魔女』——エキドナさんよ」